

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

青空文庫

一、午后ごごの授業

「ではみなさんは、そういうふうに川だと云いわれたり、乳の流れたあとだと云いわれたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊つるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指さしながら、みんなに問といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでした

が、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからな
いという気持ちができるのでした。

ところが先生は早くもそれを見附みつけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつているのでしよう。」

ジョバンニは勢いきおいよく立ちあがりましたが、立って見るともうは
つきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席
からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジ
ヨバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生
がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もう

たくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうでしょう。」

ジヨバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジヨバンニの眼のなかには涙なみだがいつぱいになりました。そうだ僕ぼくは知っていたのだ、勿論もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋しよさいから巨おおきな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁ページいつぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈はずもなかったのに、すぐに返事をし

なかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの天の川あまがわがほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利じやりの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまる

で細かにうかんでいる脂油しゆの球にもあたるのです。そんなら何
その川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある
速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮うかんでい
るのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲すんでいるわけ
です。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちようど
水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほ
ど星がたくさん集つて見えしたがって白くぼんやり見えるのです。
この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸とつレン
ズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつ

ぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄^{うす}いのでわずかの光る粒^{すなわ}即ち星しか見えないのでしよう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。

本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらくつくえふた机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅すみの桜さくらの木のところを集まっていた。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流すからすうり鳥瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振^ふつてどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝^{えだ}にあかりをつけたりいろいろ仕度^{したく}をしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴^{くつ}をぬいで上りますと、突^つき当りの大きな扉^とをあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしぼったりラムプシエードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居^おりました。

ジヨバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルに座すわつた人の所へ行つておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、「これだけ拾つて行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函はこをとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけである壁かべの隅の所へしやがみ込こむと小さなピンセットでまるで粟あ粒つぶぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼めを拭ぬぐいながら活字をだんだんひろいま

した。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいっばいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもつた紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取つて微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄にわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋へ寄つてパンの塊かたまりを一つと角砂糖を一袋ふくろ買いますと

いちもくさん
一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかつたの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくて

ね。わたしはずうつと工合がいいよ。」

ジヨバンニは玄げん関かんを上あつて行きますとジヨバンニのお母さんがすぐ入口の室へやに白しろい巾きんを被かぶつて寝やすんでいたのでした。ジヨバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰つたの。」

「ああ三時ころ帰つたよ。みんなそこらをしてきてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかつたらうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿さをとつてパンといつしよにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思ふよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数文字分空白〕」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ

」。

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちようどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途^とちゆう

にはアルコーラムで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組

み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標の
あかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。い
つかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、かま罐がすつか
りすす煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだ
しいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるでほうき箒のようだ。ぼく
が行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついて
くる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなからすうりで 烏 瓜

のあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。
」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんと一いっしょ緒なら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしまて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジヨバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片かたづ附けると勢よ

く靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、ひのき檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っています。ジョバンニが、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いまままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジ

ヨバンニの影^{かげ}ぼうしは、だんだん濃^こく黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振^ふつたり、ジョバンニの横の方へまわつて来るのでした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾^{こう}配^{ばい}だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越^こす。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た。)

とジョバンニが思いながら、大^{おお}股^{また}にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりの尖^{とが}つたシャツを着て電燈の向う側の暗い小路^{こうじ}から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云つて

しまわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいつていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠ねずみのようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざ

まの灯あかりや木の枝えだで、すっかりきれいに飾かざられた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼めが、くるつくるとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子ガラスの盤ばんに載のって星のようにゆっくり循めぐったり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこつちへまわって来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形だえんけいのなかにめぐってあらわれるようになって居おり

やはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったよ
うな帯になつてその下の方ではかすかに爆発ばくはつして湯気でもあげ
ているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚あしのつ
いた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立っていましたしいちばんう
しろの壁かべには空じゆうの星座をふしぎな獣けものや蛇へびや魚ういや瓶びんの形に書
いた大きな図がかかつていました。ほんとうにこんなような蝸ヤスリだ
の勇士だのそらにぎつしり居るだろうか、ああぼくはその中をど
こまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて
居ました。

それから俄にわかにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニ
はその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着かたの肩かたを気にし

ながらそれでもわぎと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄^すみきつて、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや櫓^{なら}の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢^{たくさん}山の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口^{くちぶえ}笛を吹^ふいたり、

「ケンタウルス、露^{つゆ}をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのに

ぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしいんとして誰も居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまつすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕ぼくんところへ来なかつたので、貰もらいにあがつたんです。」ジヨバンニが一生けん命いきおい勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦こすりながら、ジヨバンニを見おろして云いました。

「おつかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少ししたってから来てください。」その人はもう行つてしまひそうでした。

「そうですか。ではありがとうございます。」ジヨバンニは、お辞儀じぎをして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ

行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火あかりを持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうもととしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまつたように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて

叫びました。ジヨバンニはまっ赤になつて、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎようと思ひましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは氣の毒そうに、だまつて少しわらつて、怒おこらないだらうかというようにジヨバンニの方を見ていました。

ジヨバンニは、遁にげるようにその眼を避さけ、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジヨバンニは、なんとも云えずさ

びしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でぴよんぴよん跳んでいた小さな子供らは、ジヨバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジヨバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

五、天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ほんやりふだんよりも低く連つて見えました。おおぐまほし ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見

えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた鳥からすうり 瓜うりのあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松や檜ならの林を越こえると、俄にわかにがらんと空がひらけて、天あまの川がわがしらしらと南から北へ亘わたつているのが見え、また頂いただきの、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野かぎくかの花が、そこらいちめんに、夢ゆめの中からも薫かおりだしたというように咲き、鳥が一疋ひき、丘の上を鳴き続けながら通つて行き
ました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗やみの中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫さけび声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗あせでぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹りんご果を剥むいたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げ

ました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ている、そのそらはひる先生の云ったよう
な、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。それどこ
ろでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原
のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジョバンニは青
い琴ことの星が、三つにも四つにもなつて、ちらちらまたた瞬き、脚が何べ
んも出たり引つこ込んだりして、とうとう蕈きのこのように長く延びるの
を見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやっぱりぼんやりした
たくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるよう
に思いました。

六、銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく螢ほたるのように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼こうせい青せいのそらの野原にたちました。いま新らしく灼やいたばかりの青い鋼はがねの板のよ
うな、そらの野原に、まつすぐにすきつと立つたのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云いう声こゑがしたと思うといきなり眼の前が、ぱつと明る

くなつて、まるで億万の螢ほたるい鳥賊の火を一ぺんに化石させて、それから中に沈しずめたという工合ぐあい、またダイアモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫とれないふりをして、かくして置いた金剛石こんごうせきを、誰たれかがいきなりひっくりかえして、ばら撒まいたという風に、眼の前がさあつと明るくなつて、ジヨバンニは、思わず何べんも眼こすを擦こすつてしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほんとうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座すわつていたのでした。車室の中は、青い天蚕絨びろうどを張つた腰掛こしかが、まるでがら明きで、向うの鼠ねずみいろ

のワニスを塗った壁かべには、真しんちゆう鍬くわの大きなぼたんが二つ光つて
いるのでした。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い
子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そ
してそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気
がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たま
らなくなりました。いきなりこっちも窓から顔を出そうとしたと
き、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こっちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云
おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」と云いました。

ジョバンニは、（そうだ、ぼくたちはいま、いつしよにさそつて出掛けたのだ。）とおもいながら、

「どこかで待っていていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎むかいにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気

持ちがしてだまってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、いきおい勢よく云いました。

「ああしまった。ぼく、すいとう水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れ

てきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、

白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたって、

ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになつた地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まっ

たくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤ばんの上に、一一の停車場や

さんかくひょう

三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジヨバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジヨバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジヨバンニは、白鳥と書いてある駐車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原かわらは月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすつきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジヨバンニは云いながら、まるではね上りたいくらい愉快ゆかいになって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛くちぶえを吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼めの加減か、ちらちら紫むらさきいろのこまかな波をたてたり、虹にじのようにぎらつと光った

りしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、りんこう 燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。

遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、ある 或いは三角形、或いは四辺形、あるいはいなすまざり 電や鎖の形、さまざまにらんで、野原いっぱい光っているのです。ジヨバンニは、まるでどきどきして、頭をやけにふ振りましました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたりふる顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に來た。」ジヨバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジヨバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光びこうの中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草しばくさの中に、月長石つきやでも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせよう

か。」ジヨバンニは胸を躍おどらせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行つてしまつたから。」

カムパネルラが、そう云つてしまふかしまわないうち、次のりんだうの花が、いっぱいいっぱいに光つて過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんたくさんのきいろな底をもつたりんだうの花のコップが、湧わくように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光つて立つたのです。

七、北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、せ急きこんで云いいました。

ジヨバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのよ
うに見えるだいたい橙いろの三角標のあたりにいらつしやつて、いまぼく
のことを考えているんだった。）と思いながら、ぼんやりしてだ
ままっていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでも
する。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの
幸さいわいなんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたい

のを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」
ジョバンニはびつくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなか^{にわ}が、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石^{こんごうせき}や草の露^{つゆ}やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床^{かわとこ}の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの

島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架じゅうじかがたつて、それはもう凍こおった北極の雲で鑄いたといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいで、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声がありました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水すい晶しょうの珠じ数ゆずをかけたたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そつちに祈いのっているのです。思わず二人もまつすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬ほほは、まるで熟した苹果りんごのあかしのようにつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きま
した。

向う岸も、青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やつぱりす
すきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむって、息
でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草を
かくれたり出たりするのは、やさしい狐きつねび火のように思われまし
た。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列で
さえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えました
が、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつてしまい、ま
たすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなつてし

まいました。ジヨバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼あまさんが、まん円な緑の瞳ひとみを、じつとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わって来るのを、つつし度んで聞いているというように見えしました。旅人たちはしずかに席せきに戻り、二人も胸むねいっばいのかなしみに似た新らしい気持ちはなを、何気なくちがった語ことばで、そつと談はなし合ったのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑あかりの燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄いおうのほのおのようなくらいぼんやり

した転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤ダイアル面には、青く灼やかれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなつてしまいました。

〔二十分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジョバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて
 行きました。ところが改札口には、明るい紫がかった電燈が、一
 つ点ついてるばかり、誰も居たりませんでした。そこら中を見ても、
 駅長や赤帽あかぼうらしい人の、影かげもなかつたのです。

二人は、駐車場の前の、水晶細工のように見える銀杏いちょうの木に
 囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅はばの広いみちが、ま
 つすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませ
 でした。二人がその白い道を、肩かたをならべて行きますと、二人の
 影は、ちようど四方に窓のある室へやの中の、二本の柱の影のように、
 また二つの車輪の輻やのように幾本いくほんも幾本も四方へ出るの
 でした。

そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原かわらに來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌てのひらにひろげ、指できしきしさせながら、夢ゆめのように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫こいしは、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉トパースや、

またくしやくしやの皺しゅうきよく曲をあらわしたのや、また稜かどから霧きりの

ような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走つてそ

の渚なぎさに行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀

河の水は、水素よりもつとすきとおつていたのです。それでも

たしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできなかった波は、うつくしい燐光りんこうをあげて、ちらちらと燃えるように見えたとでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えている崖がけの下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈かがんだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になった処ところの入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物せともののつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干らんかんも植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖とがったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見よう。きっと何か掘ってるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近よつて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴ながぐつをはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴つるはしをふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中むちゆうでいろいろ指図をしていました。

「そのその突起とつきを壊こわさないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘つて。いけない、いけない。

なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝からも出る。いま

川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿のみでやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要いるんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証しょうこ拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋ろっこつ骨が

埋もれてる筈はずじゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計うでどけいとをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙いそがしそうに、あちこち歩きまわって監督かんとくをはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝ひざもあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけられると、ジヨ

バンニは思いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなつて、間もなく二人は、もとの車室の席に座^{すわ}つて、いま行つて来た方を、窓から見ていました。

八、鳥を捕^とる人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外^{がい}套^{とう}を着て、白^{きれ}い巾^{きん}でつつ

んだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆつくり網棚あみだなにのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうっと前の方で、硝子の笛ガラスふえのようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室の天井てんじょうを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲虫かぶとむしがとまってその影が大きく天井にうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバ

ンニやカムパネルラのようにすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなつて、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジヨバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧け嘩んかのようにたずねましたので、ジヨバンニは、思わずわらいまし

た。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒おこったでもなく、頬ほほをびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁がんです。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか

」。

「いいえ。」

「いまでも聞えるじやありませんか。そら、耳をすまして聴きいて
ごらんなさい。」

二人は眼めを挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひび
きと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧わくような音
が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺はぎですか。」

「鷺です。」 ジョバンニは、どつちでもいいと思ひながら答えま
した。

「そいつはな、雑作ぞうさくない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝こごつて、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚あしをこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押おさえちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審ふしんもありませんや。そら。」その男は立って、網

棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに驚だねえ。」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさつきの北の十字架じゆうじかのように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべったくなくて、黒い脚をちぢめて、浮彫うきぼりのようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑つぶった眼にさわりました。頭の上の槍やりのような白い毛もちやんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷ふろしきを重ねて、またくるくと包んで紐ひもでくくりました。誰たれがいったいここらで鷺なんぞ喰たべ

るだろうとジヨバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁がんの方が、もっと売れます。雁の方がずっと柄がらがいいし、第一手数がありませんからな。それ。
。」 鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちようどさつきの鷺のように、くちばしを揃そろえて、少し扁ひらべったくなつて、ならんでいました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」
鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはな

れました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジヨバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかつたのですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云つて遠慮えんりよしましたら、鳥捕りは、

こんどは向うの席の、鍵かぎをもった人に出しました。

「いや、商売ものを貰もらつちやすみませんな。」その人は、帽子ぼうしをとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥わたどりの景気は」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日おとといの第二限ころなんか、なぜ燈台の灯ひを、規則以外に間「一字分空白」させるかって、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじゃないなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつて仕方がねえや、

ばさばさのマントを着て脚と口との途方とほうもなく細い大将へやれつて、斯こう云つてやりましたがね、はっは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射さして来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊きこうと思つていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけあ、砂に三四日うずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切ったというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立って荷物をとったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだらう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少しの伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを

見ていたのです。

「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体きたいだねえ。きつとまた鳥をつかまえるところだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおりるといいな。」と云つた途端とたん、がらんとした桔梗きぎよういろの空から、さつき見たような鷺あしが、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいに舞まいおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり六十度ろくじゅうどに開いて立つて、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片かたつ端はしから押えて、布の袋ふくろの中に入れるのでした。すると鷺は、ほたる蛍ほたるのように、袋の中でしばらく、青くペかペか光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなつて、

眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天あまの川がわの砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや否いなや、まるで雪の融とけるように、縮ちぢまって扁ひらべったくなくなって、間もなく熔よう鋳こう炉ろから出た銅しるの汁じゅうのように、砂や砂利じやりの上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についていたのでしたが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまふのでした。

鳥捕りは二十疋びきばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾てつぽうだまにあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだにちようど恰度合うほど稼かせいでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声
が、ジョバンニの隣となりにしました。見ると鳥捕りは、もうそこで
とつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているの
でした。

「どうしてあすこから、いつぺんにここへ来たんですか。」ジョ
バンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないよう
な、おかしな気がして問いました。

「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた
方は、どちらからおいでですか。」

ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたが、さあ、

ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまつ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかつたというように雑作なくうなずきました。

九、ジヨバンニの切符きつぷ

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中

に、黒い大きな建物が四棟むねばかり立つて、その一つの平屋根の上に、眼めもさめるような、青宝サファイア玉と黄トパーズ玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこつちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸とつレンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環わとができました。それがまただんだん横へ外それて、前のレンズの形を逆に繰くり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河

の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、ねむ睡っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」「鳥捕りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶつたせいの高い車掌しゃしょうが、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジヨバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジヨバンニは困って、もじもじしていましたら、カム

パネルラは、わけもないという風で、小さな鼠ねずみいろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳たたんだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらうかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やつちまえと思つて渡しましたら、車掌はまつすぐに立ち直つてていねい町寧ていねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつ

たと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになったのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だだいじょうぶと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行き
ました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのできこみました。ジョバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草からくさのような模様の中に、

おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのでした。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじやない、どこでも勝手にあ
るける通行券です。こいつをお持ちになればあ、なるほど、こんな
不完全な幻想げんそう第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈はず
でさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジヨバンニが赤くなつて答えながらそ
れを又また畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカム
パネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕り

の時々大したもんだというようにちらちらこつちを見ているのが
ぼんやりわかりました。

「もうじき鷺わしの停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つな
らんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較みくらべて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにと成りの鳥捕
りが気の毒でたまらなくなりました。鷺さぎをつかまえてせいせいし
たとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの
切符をびつくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そ
んなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのた
めに、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでも
やってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸さいわいになるなら自分が

あの光る天の川の河原かわらに立って百年つづけて立って鳥をとってや
つてもいいというような気がして、どうしてももう黙だまっていられ
なくなりました。ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、
と訊きこうとして、それではあんまり出し抜けぬだから、どうしよ
かと考えて振り返ふって見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居
ませんでした。網あみ棚だなの上には白い荷物も見えなかつたのです。
また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺を捕したくる支度をして
いるのかと思って、急いでそっちを見ましたが、外はいちめんの
うつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせな
かも尖とがった帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう。」カムパネルラもぼんやりそう云つ

ていました。

「どこへ行ったろう。一体どこでまたあうのだろう。僕は**ほく**どうしても少しあの人に物を言わなかったろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はその人が邪魔な**じゃま**ような気がしたんだ。だから僕は**大へんつ**らい。」**ジョバンニ**はこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思いました。

「何だか**りんご**の匂が**におい**する。僕いま**蘋果**のこと考えたためだろうか。カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。」

「ほんとうに**蘋果**の匂だよ。それから**野****のいばら** **茨**の匂もする。」**ジョバンニ**もそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来

るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないと
ジヨバンニは思いました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男
の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびっくりしたような
顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣りには黒
い洋服をきちんと着たせいふの高い青年が一ぱいに風に吹かれてい
るけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っ
ていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろ
にもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒かあい外が
套いとうを着て青年の腕うでにすがって不思議そうに窓の外を見ているの

でした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コネクテカツト州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召めされているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いいました。けれどもなぜかまた額ぬかに深く皺しわを刻んで、それに大へんつかれていられるらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座すわらせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座すわつて、きちんと両手を組み合

せました。

「ぼくとおおねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛こしかけたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらっしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわとこのやぶをまわってあそ

んでいるだろうかとか考えたりほんとうに待って心配していらつしやるんですから、早く行つておつかさんにお目にかかりませうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅して、じき神さまのところへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやったのですか。どうなすったのですか。」さっきの燈台看守がやっと少しわかったように青年

にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈しずみましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発たつたのです。私は大学へはいつていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど十二日目、今日か昨日きのうのあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾かたむきもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧きりが非常に深かったのです。ところがボートは左舷さげんの方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫さけびました。近くの人たちはすぐみ

ちを開いてそして子供たちのために祈いのって呉くれました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しおしのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたから前にいる子供らを押しおしのけようと思いました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。よってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂きょう気きのようにキスを送りお父さんがかな

しいのをじつところえてまつすぐに立つているなどとてももう腸はらわたもちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟かくごしてこの人たち二人を抱だいて、浮うかべるだけは浮ぼうとかたまつて船の沈むのを待っていました。誰たれが投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれども滑すべつてずうつと向うへ行つてしまいました。私は一生けん命で甲かんぼん板こうしの格子こうしになつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく「約二字分空白」番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄にわかに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦うずに入ったと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたら

もうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没^なくなられました。ええボートはきつと助かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕^こいですばやく船からはなれていましたから。」

そこから小さいいのりの声が聞えジヨバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼^めが熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍^{こお}りつく潮水や、烈^{はげ}しい寒さとたたかかって、たれかが一生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそして

すまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。」ジヨバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしみちを進む中でできごとなら峠とうげの上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉きょうだい弟はもうつかれてめいめいぐったり席により

かかつて睡ねむっていました。さつきのあのはだしだった足にはいつか白い柔やわらかな靴くつをはいていたのです。

ごとごとごとごとと汽車はきらびやかな燐りんこう光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻げんとう燈のようでした。百も千もの大きさまざまの三角標、その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおつと青白い霧のよう、そこからかまちはもつと向うからかときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のろしのようなものが、かわるがわるきれいな桔きぎよう梗よういろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗きれいな風は、ばらの匂においでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果りんごはおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金きんと紅べにでうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝ひざの上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですなあ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとつてジヨバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ぼっちゃんか。いかがですか。おとり下さい。」
ジヨバンニは坊ちゃんといわれたのですこししやくにさわって

だまっていたいましたがカムパネルラは

「ありがとうございます」と云いました。すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送つてよこしましたのでジヨバンニも立ってありがとうと云いました。

燈台看守はやつと両腕りょううでがあいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでもいいものができるような約束やくそくになつて居おります。農業だつて

そんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子たねさえ播まけ
ばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺のよう
に殻からもないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたが
たのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓
子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとに
よつてちがつたわずかのいいかおりになつて毛あなからちらけて
しまうのです。」

にわかにも男の子がぱつちり眼をあいて云いました。

「ああぼくいまお母さんの夢ゆめをみていたよ。お母さんがね立派な
戸棚とだなや本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこに
こにこにこわらつたよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきて

あげましようか云つたら眼がさめちやつた。ああここさつききの汽車のなかだねえ。」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」

姉はわらつて眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰たべるようにもうそれを喰べていました、また折せつ角かく剥むいたそのきれいな皮も、くるくるコルクぬ抜きぬきのようになつて床ゆかへ落ちるまでの間にはすうつ

と、灰いろに光って蒸発してしまふのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂しげった大きな林が見え、その枝えだには熟してまつ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフオンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸しみるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまつてその譜ふを聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまつ白な蠟ろうのような露つゆが太陽の面を擦かすめて行くように思われました。

「まあ、あの鳥^{からす}。」カムパネルラのとりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱^{しか}るように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原^{かわら}の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になつてとまってじつと川の微光^{びこう}を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びていますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。

そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた「約二字

分空白」番の讚美歌さんびかのふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座すわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰たれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラも一いっしょ緒しよにうたい出したのです。

そして青い橄欖かんらんの森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまひそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗へらされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀くじやくが居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなっていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかおる子に云いいました。

「ええ、三十疋びきぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジョバンニは俄にわかに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわ

い顔をして云おうとしたくらいでした。

川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛ゆるい服を着て赤い帽子ぼうしをかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。が俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈はげしく振ふりました。すると空中にざあつと雨のような音がして何かまっくらなものはいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸てっぽうだまのように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげま

した。美しい美しい桔梗きぎよういろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組いくくみも幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気きようきのようにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群は通らなくなりそれと同じにぴしやあんという潰つぶれたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫さけんでいたのです。

「いまこそわたれわたし鳥、いまこそわたれわたし鳥。」その声

もはつきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそらをまつすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬ほほをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいと思いながらだまつて口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてだまつて席へ戻もどりました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引こつ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそつとカムパネ

ルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジヨバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立つて口くちぶえ笛ふを吹いていました。

（どうして僕はぼくはこんなになしひのだろう。僕はもつとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかであつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをし

ずめるんだ。）ジヨバンニは熱^{ほて}って痛いあたまを両手で押^{おさ}えるようにしてそつちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談^{はな}しているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジヨバンニの眼はまた涙^{なみだ}でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖^{がけ}の上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがつてだんだん高くなつて行くのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞^{ほう}が赤い毛を吐^はいて真珠のような

実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめん植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石こんごうせきのように露つゆがいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからただぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていく

つかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなく汽車もうごかずしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈たけたか高い青年も誰もみんなやさしい夢ゆめを見ているのでした。

(こんなしずかないとこで僕はどうしてもつと愉快ゆかいになれない

だろう。どうしてこんなにひとりきびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っていないがらまるであんな女の子とばかり談はなしているんだもの。僕はほんとうにつらい。」ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子ガラスのような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰たれかとしよりらしい人のいま眼めがさめたという風ではきはき談はなしている声がしました。

「どうもろこしだって棒で二尺も孔あなをあけておいてそこへ播まかな

いと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありましようかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峽きょうこく谷こになつていゝんです。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたらうか、ジヨバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果りんごのような顔いろをしてジヨバンニの見る方を見ているのでした。突とつぜん然ぜんとうもろこしがなくなつて巨おおきな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響樂はいよいよはつきり地平線のはてから湧わきそのまつ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたく

さんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追って来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」
黒服の青年も眼をさましました。ジヨバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけているんですよ。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。猫をするか踊るかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風ポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけ

るにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるようになりインデアンはぴたつと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴つるがふらふらと落ちて来てまた走り出したインデアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影かげももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碍がいし子こがきらつきらつと続いて二つばかり光ってまたとうもろこしの林になってしまいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖がけの上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅はばひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜けいしゃがあるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

どろどろどろどろ汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通つてその前にしよんぼりひとりの子供が立つてこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どろどろどろどろ汽車は走って行きました。室へやじゆう中のひとた

ちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛こしかけにしつかりしがみついでいました。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほどはげ激しく流れて来たらしきときどきちらちら光つてながれているのでした。うすあかい河原かわらなでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆつくりと走っていました。

向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたつていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジヨバンニがやつとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいであるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじやないんでしようか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらつと光つて柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりしました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたくらい気持ち

が軽くなつて云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快的旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談はなしにつり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかつたねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌きげんが直つて面白おもしろそうにわらつて女の

子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聞いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」

「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだらう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おつかさんお話をすつたわ、……」

「それからほうきぼし彗星がギーギーフーギーフーて云つて来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいまふえ笛を吹いて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸がにわ俄かに赤くなりました。楊やなぎの木や何かもまつ黒に

すかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗ききょういろのつめたそうな天をも焦こがしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにチウムよりもうつくしく酔よったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジョバンニが云いいました。

「蠍さそりの火だな。」カムパネルラが又また地図と首くびつ引きして答えました。

「あら、蠍の火のことならあたし知ってるわ。」

「蠍の火ってなんだい。」ジョバンニがききました。

「蝎がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

「蝎って、虫だろう。」

「ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝎いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫さされると死ぬって先生が云つたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯こう云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見附みつかつて食べられそうになつたんですって。さそりは一生けん命遁にげて遁げ

たけどとうとういたちに押おきえられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺おぼれはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈いのりしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉くれてやらなかつたろう。そしたらいちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにもなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみん

なの幸さいわいのために私のからだをおつかい下さい。って云つたというの。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さんおっしや仰つたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にならんでいるよ。」

ジョバンニはまつたくその大きな火の向うに三つの三角標がちようどさそりの腕うでのようにこつちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまさまの樂の音ねや草花なおいの匂においのようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのでした。

「ケンタウル露つゆをふらせ。」いきなりいままで睡ねむっていたジヨバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマスストリイのようにまつ青な唐檜とうひかもみの木がたつてその中にはたくさんほたるのたぐさんのたぐさんの豆電燈まめでんとうがまるで千の蛍ほたるでも集つたようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿一枚？なし」

「ボール投げなら僕決しては**ほく**ずさない。」

男の子が大威張りおおいばで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度したくをして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョンバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりなけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭いやだい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一いっしょ緒に乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符きっぷ持つてるんだ。」

「だけどあたしたちももうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」

「だっておつ母さんも行ってらっしやるしそれに神さまが仰おつしやるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの

神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなたの方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。女の子もちやうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜おしそうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」
ああそのときでした。見えない天の川の川のずうつと川下に青だいたいや橙だいだいやもうあらゆる光でちりばめられた十字架じゆうじかがまるで一本の木と
いう風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまる

い環わになつて後光のようにかかつているのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜うりに飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いような深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果りんごの肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞めぐっているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈あかりの灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりと

うとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。
「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえつて二人に云いました。

「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒つたようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえつてそれからあとともうだまつて出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄かにがらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見てみるとみんなはつつましく列を組んであの十字架の

前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えな
い天の川の水をわたつてひとりの神こうこう々々しい白いきもの人が手
をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのとき
はもう硝子ガラスの呼子よびこは鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀い
ろの霧きりが川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見え
なくなりました。ただたくさんくるみの木が葉をさんさんと光
らしてその霧の中に立ち黄金きんの円光をもつた電気栗鼠りすが可愛かあいい顔
をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道ら
しく小さな電燈の一行にいた通りがありました。それはしばらく

く線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちようど挨拶あいさつでもするようにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなつてしまいほんとうにもうそのまま胸にも吊つされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚なぎさにまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになつたねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとう

にみんなの幸さいわいのためならば僕の中からだなんか百ぺん灼やいてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジヨバンニが云いいました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いいました。

「僕たちしつかりやろうねえ。」ジヨバンニが胸むねいっぱい新あららしい力が湧わくようにふうと息をしながら云いいました。

「あ、あすこ石炭袋ふくろだよ。その孔あなだよ。」カムパネルラが少しそつちを避さけるようにしながら天の川のひととを指さしました。

ジヨバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川のひとこに大きなまつくらの孔がどほんとあいているのです。その底がどれほど深いかその奥おくに何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えただ眼がしんしんと痛むのでした。ジヨバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗やみの中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄にわかに窓の遠

くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそつちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラの座^{すわ}っていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。ジョバンニはまるで鉄砲丸^{てつぽうだま}のように立ちあがりました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだ

を乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽のど喉どいっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまつくらになつたように思いました。

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘おかの草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱ほてり頬ほほにはつめたい涙がながれていました。

ジヨバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさつきつぎの通りに下でたくさんさんの灯を綴つづつてはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたつたい夢ゆめであるいた天の川もやっぱりさつきつぎの通りに白くぼんやりかかりま

つ黒な南の地平線の上では殊ことにけむったようになってその右には蠍さそりぎ座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変つてもいないようでした。

ジヨバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。どんどん黒い松まつの林の中を通つてそれからほの白い牧場の柵さくをまわつてさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰つたらしくさつきなかつた一つの車くるまが何かの樽たるを二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて一本の牛ぎゆうに
乳ゆうびん 瓶びん をもつて来てジョバンニに渡わたしながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりして
こうしの柵をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ
行つて半分ばかり呑んでしまいましたね……」その人はわらいま
した。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつてその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行つた川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談はなしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一いっせい齊にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りしました。橋の上は人でいっぱい河が見えませんでした。白い服を着た巡じゆんさ査も出ていました。

ジヨバンニは橋の袂たもとから飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水みずぎわ際に沿ってたくさんのかかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏からすうり 瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのです。

河原のいちばん下流の方へ州すのようになつて出たところに人の

集りがくつきりまつ黒に立っていました。ジヨバンニはどんどんそっちへ走りました。するとジヨバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしよだったマルソに会いました。マルソがジヨバンニに走り寄ってきました。

「ジヨバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押しおてやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落つこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまっただけれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みつからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖とがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじつと河を見ていました。誰たれも一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえましました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れている

のが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨おおきく写つてまるで水の無いそのままのそらのように見えました。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかつたのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄にわかにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目だめです。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよつて博士の前に立つて、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといつしよに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまつて何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶あいさつに来たとても思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ましたがい

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」
と町ていねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅かたく時計を

握にぎつたままたききました。

「いいえ。」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日おととい大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅おくれたんだな。

ジヨバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつつた方へじつと眼を送りました。

ジヨバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の

方へ走りました。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二卷」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：中村隆生、野口英司

校正：野口英司

1997年10月28日公開

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>